

自主シンポジウム 12

メディアリテラシーの教育実践とその効果について考える

企画者：村野井 均 福井大学教育地域科学部助教授
司 会：白石 信子 NHK編成局編成チーフディレクター
兼NHK放送文化研究所主任研究員

シンポジスト：

メディアリテラシーの教育に期待する

加藤 滋紀 放送番組向上協議会専務理事

メディアリテラシー教育のカリキュラム：実践と有効性

駒谷 真美 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

テレビ理解の教育実践をおこなって

落合 文江 東京都新宿区立牛込仲之小学校教諭

児童の映像制作とその効果

村野井 均 福井大学教育地域科学部助教授

コメンター：

無藤 隆 お茶の水女子大学生生活科学部教授

企画の主旨

メディアリテラシーの取り組みが、学校で行われるようになってきた。放送局からは、より積極的に取り組まれ、全国の民間放送が「てれびキッズ探偵団」を1999年11月から12月にかけて放送した。NHKも4月から学校放送の時間にメディアリテラシー番組「しらべてまとめて伝えようーメディア入門」の放送を始めた。これは予定を2年早めて開始されている。

今回のシンポジウムでは、放送文化基金の助成を受けて、映像の読みと書きの観点から行われた2種類の教育実践を紹介し、その教育効果や研究方法、および学校・放送局・研究者の協力について考えたい。

メディアリテラシーの教育に期待する

加藤 滋紀

加藤氏は民放連とNHKで作る放送番組向上協議会の専務理事である。視聴者の意

見を受け、対応する「放送と青少年に関する委員会」の運営を担当している。元NHKプロデューサーで、現在は視聴者の声にもとづいてテレビ番組の向上をはかる立場にいる方である。メディアリテラシーの教育について、テレビマンの立場から期待を述べてもらう。

メディアリテラシー教育のカリキュラム

：実践と有効性 駒谷真美

今回の発表では、「メディアリテラシー教育」のカリキュラムを作成・実践した結果を報告する。

多くの教師にとっては、「メディアリテラシー教育」は“未知の世界”である。日本では、欧米のように県（州）国レベルで小学校から高校までの体系的な「メディアリテラシー教育」のカリキュラムが、まだ出来ていない。この教育に興味を持っている現場の一部の教師が、実験的に各自、生活

科・国語科・社会科・音楽科などの教科に取り入れているのが現状である。学年毎のカリキュラムやクラスに合った指導プランを提供したり、授業後の評価方法やフォローの仕方をアドバイスするような、教師をサポートするシステムがあれば、実践を希望する教師が増えるのではと考える。

そこで、駒谷は、「メディアリテラシー教育」のカリキュラムを実験的に作成し、その有効性を調べた。「メディアリテラシー教育」に必要とされる課題の中から、「テレビの映るしくみの理解」・「テレビ番組の種類」の把握」・「テレビの現実と空想の理解」に関する3課題を選び、小学5年生を対象に、4時間授業を行った。主に番組や登場人物を録画したビデオを視聴後、ワークシートを完成させ、グループ討論する形式を取った。プレテスト（最初の授業で実施）の結果、全体として、小学5年生のテレビに対する知識・認識は表面的かつ断片的であることがわかった。テレビの映像制作面の知識は獲得されているが、「テレビの現実と空想の理解」については未消化の部分が残っていた。4時間の授業後、ポストテストを実施した結果、前出の3課題について、子どもの理解度は有意に増したが、「テレビの現実性の理解」については、一過性の授業ではなく、加齢に従いスパイラルに理解度を深めていくカリキュラムの必要性が示唆された。

テレビ理解の教育実践をおこなって

落合文江

今、情報化社会に対応できる子供の育成を目指し多くの実践研究がなされている。その多くは、コンピューターの活用に関するものである。確かに、コンピューターをいかに活用するかということは、これから

の子供にとって重要な課題である。しかし、多くの子供はパソコンと接する時間よりもテレビとつきあう時間の方が長いのが実状である。一週間の生活調べ（本校保健部調査）においてもテレビとの密着度の強さが就寝・起床時刻に強い影響を与えていること、そのために健康面に影響があること等が明らかになっている。

この点からも、子供たちにとってテレビとの関係を受け身ではなく、主体的な関係にしていくことは重要であると考えられる。

今回のテレビ理解の学習は、テレビが映像として伝わる仕組みやテレビ番組、CM、テレビ用語、テレビ視聴日記等の学習で構成されていて、メディア理解の基礎的学習として楽しくわかりやすい学習活動となった。また、学習したことがすぐに自分の生活に生かされ、家庭の中で再学習（復習）されることになった。このテレビ理解の学習の授業の様子や学習後の子供たちの様子を提示する。

児童の映像制作とその効果

村野井 均

小学5年生の学校紹介ビデオ作りの過程を東京と福井の公立校で追跡した。児童は映像作品を制作することができた。pre-post テストの比較では「カメラの位置、映し方」「番組のねらい」という製作者の視点で有意に高い点が出た。

NHK福井局では「発信 マイスクール」というコーナーで児童・生徒の制作した映像を週1回、放送し始めた。学校と放送局の協力例についても触れる。

すべてが新しい試みため、実践の意義や授業方法、評価法など意見をうかがい、交流したい。